

マツノマダラカミキリの発消長

江崎功二郎

I はじめに

1999～2002年までの4年間、マツノマダラカミキリの発消長調査を行ったので、その結果について報告する。なお、本調査は林野庁補助事業「松くい虫発生予察事業」で行った。

本調査に当り、ご協力して頂いた農政課の八島武志氏、珠洲農林総合事務所の宮崎顕治氏、林業試験場の片岡久雄氏および森吉昭氏に厚くお礼申し上げる。

II 調査法

マツノマダラカミキリの穿孔丸太(長さ1m、直径10～20cm)を羽咋郡押水町～志賀町で1～3月にかけて採集した。これらの丸太を約40本ずつ容積2m³の網室に入れ、4月中旬までに3調査地に設置した。調査地は押水町免田、富来町深谷および珠洲市若山町中田の松林である。調査は5～9月まで約5日間隔で行い、マツノマダラカミキリの発生数を数えた。発生したマツノマダラカミキリは捕殺した。有効積算温度は発育零点を12℃として、日平均気温との差より積算して求めた。平均気温データは羽咋気象観測点、富来気象観測点および珠洲気象観測点のアメダスデータベースより引用した。

II 結果と考察

マツノマダラカミキリの初発生日は5月下旬～6月下旬までに各調査年および各調査地で確認されたが、調査年および調査地ごとに一定の傾向はみられなかった(図-1)。50%発生日は押水町—富来町—珠洲市の順番で遅くなる傾向がみられた。

発生期間も珠洲で遅くなる傾向があり、最も遅い発生日は2000年8月10日であった(図-1)。

また、有効積算温度と累積発生割合の関係をみると、マツノマダラカミキリの初発生は150～410日度の範囲で各調査年および各調査地で確認されたが、調査年および調査地ごとに一定の傾向はみられなかった(図-1)。50%発生日は押水町の有効積算温度が低くなる傾向があり、1999年を除くと富来町および珠洲市は約550日度であった(図-1)。

マツノマダラカミキリの発消長は日平均気温が発育零点を上回る4月以降の気象に影響を受けており、それ以前に詳細な発消長を予測することは困難である。

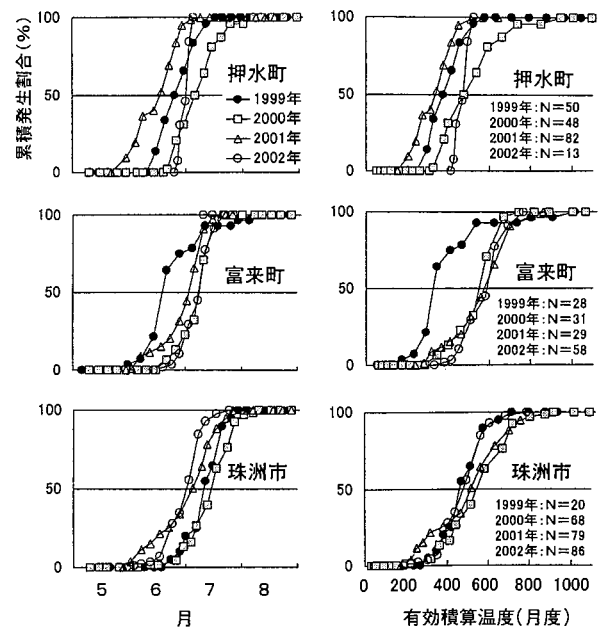


図-1 マツノマダラカミキリの発生経過と有効積算温度の関係